

しらわき  
白脇地区

地域愛称マップ

知って  
楽しむ  
私たちの街  
白脇地区

白羽神社  
(白羽町)

浜松まつり凧揚げ会場  
(白羽町)

三島楊子公園  
(楊子町)

遠州灘海浜公園  
(中田島町)

中田島砂丘  
(中田島町)

## 1 楊子橋通り (ようすばしどおり)



馬込川に架かる楊子橋から東へ、団地通りと交差する道をいう。  
楊子とは、小さい柳のことで、昔この付近の土手や水田のあぜ道に柳の小木がたくさん生えていたことから、このような名が生まれたといわれている。



## 2 楊子中央通り (ようすちゅうおうどおり)



旧市内から三島橋を渡ったところから東へ、楊子町の中央を東西に走る通りである。  
楊子町は、江戸時代前期には三島新屋と呼ばれ、三島村に含まれていたが、やがて楊子村と改められた。  
昭和 14 年、浜松市に合併した。



## 3 学校通り (がっこうどおり)



楊子町民館東から南へ、白脇小学校へ通じる道路である。  
白脇小学校は、明治 14 年 1 月に創立された。現在でも多くの児童が通学に利用している。



## 4 カニ草通り (かにくさどおり)



町北方の集落に沿って、団地通りから東に通じる道をいう。  
昔はこの辺りをカニ草と呼んでいたため、このように名付けられた。  
付近のバス停にもカニ草という名が付いているが、いわれについては諸説があり、はっきりしない。



## 5 宮前通り (みやまえどおり)



浜松神社南側の道路であるため、このように名付けられた。  
浜松神社は、その昔「三島大明神」と呼ばれていた。神社の隣に、曹洞宗の神宮寺があるが、神社と寺を一区域にまとめて祭る形式は、伊豆の三島大社と同じである。



## 6 灯籠通り (とうろうどおり)



町西部の通りで、宮前通りから南へ通じている。  
この道は昔、西河原通りといわれていた。しかし、沿道に秋葉灯籠が建っていることからいつのまにか子供たちの間でこのように呼ばれるようになった。



## 7 中央通り (ちゅうおうどおり)



馬込川に架かる三島橋から南へ、阿弥陀寺の西側を通って、寺脇町との境までをいう。  
三島町地内を南北に走る一番にぎやかな道路である。  
町内のほぼ中央を通るため、このように名付けられた。



## 8 野畔通り (のぐるどおり)



野畔とは、町内の字名である。  
瓜内町には、このほかに北浦、西川原、村合、池、堰下、十三石、天白、中川原、川原、前川、本田の 12 の字があった。



## 9 天白通り (てんぱくどおり)



天白様を祭る六所神社の前を通るので、このように名付けられた。  
昔、瓜内の村人たちは、この地に天白様を祭り、村内の安全を祈願したといわれている。



## 10 瓜内通り (うりうちどおり)



旧中田島街道の一部で、瓜内橋から南へ、白羽町へ抜ける道をいう。この道は、昔、大幹と呼ばれてこの辺りの人たちに親しまれていた。瓜内の町名は、この地で瓜づくりが盛んであったため名付けられたといわれているが定かではない。



## 11 下村橋通り (しもむらばしどおり)



下水処理施設中部浄化センター北側から東へ、馬込川に架かる下村橋を渡り、中田島街道(有玉南・中田島線)へ通じる道をいう。  
昔、この付近は瓜内村の下の方(川の downstream)に当たるので下村といわれていた。



## 12 赤池堤 (あかいつつみ)



県道舞坂・竜洋線の北側、浜松鉄工団地の東に、鉄分を多量に含んだ赤い水の池がたくさんあった。その間を縫って造らせた堤防のため、赤池堤と名付けられた。  
天竜川の決壊に備えたこの地では、最も重要な堤防であった。



## 13 団地通り (だんちどおり)



浜松鉄工団地の西側を森下団地へ通じる道をいう。  
鉄工団地は、昭和 37 年から 41 年に完成し、金属機械器具製造業種の企業がこの団地に連なっている。この道路は都市計画道路小池三島線で、北へ行くとき小池町に通じる。



## 14 寺脇支校跡地 (てらわきしこうあとち)



大正 14 年 4 月、竜禅寺村に竜禅寺小学校が設置された。その支校が上中島村、寺脇村に設けられた。  
寺脇村では、これに先立って、神谷権次郎が自ら校舎を建て、子弟の教育をしており、ここに支校が置かれた。その跡地をいう。



## 15 中上道路 (なかみどうろ)



般若寺の南側を東へ、浜松鉄工団地までの東西の道をいう。  
この辺りの地名を中上というため、このように名付けられた。  
当地域において、県道舞坂・竜洋線から北では、一番重要な道路となっている。



## 16 村中の道 (むらなかのみち)



白脇小学校東で、県道舞坂・竜洋線から南へ、寺脇川までの道である。  
寺脇村当時からこの道で、村の中を通るのでこの名が付けられた。寺脇は江戸時代には敷智郡寺脇村であった。その後、白脇村となり昭和 14 年に浜松市に合併された。



# 地域愛称マップ

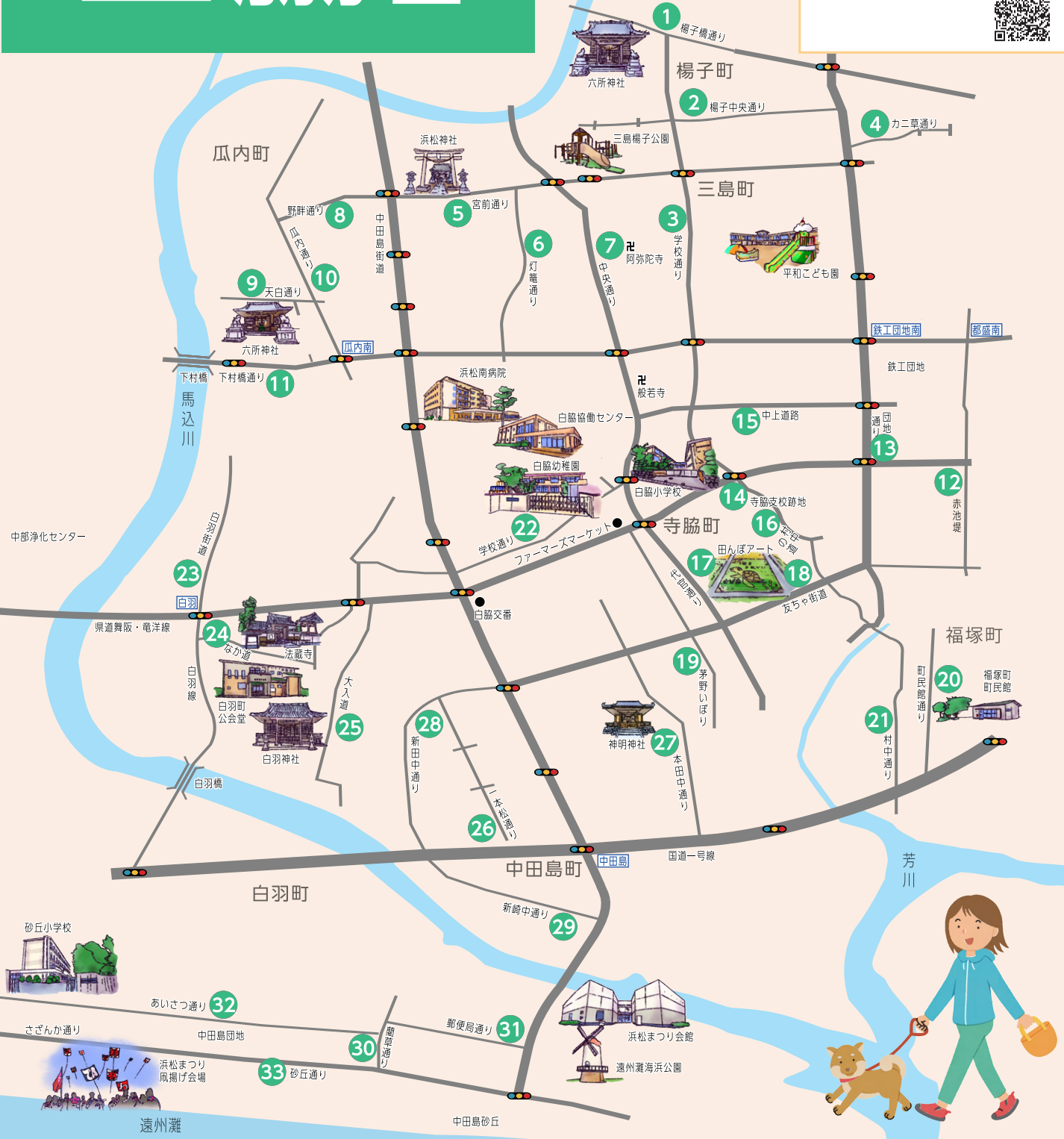
## しらわき

# 白脇地区

### 17 代官通り (だいかんどおり)



般若寺西から、白脇小学校校門前を通る南北の道をいう。友ちゃ街道と交差している。昔、三島村の代官が、芽野いぼりを舟で下って検見に来たので、この辺りは代官と呼ばれるようになったといわれる。



18 友ちゃ街道(ともちゃかいどう)



森下団地の北側から西へ、本田中通りまでの道をいう。昭和33年、土地改良が始まった時、この近くに住んでいた友ちゃという人が、仕事の合間によく人を笑わせていた。このころからだれいともなくこの名で呼ぶようになった。



19 茅野いぼり(かやのいぼり)



三島町から寺脇町に流れる三島排水路のうち、県道舞坂・竜洋線から南を茅野のいぼりと呼んでいる。茅野は、この辺りの地名である。付近が天竜川の流路の一部だったころ、一面にカヤが茂っていたので、この名が名付けられたといわれている。



20 町民館通り(ちょうみんかんどおり)



福塚町町民館の西側の南北道路をいう。昭和47年、町民待望の土地改良事業と町民館建設がほぼ同時に完了した。将来ますます楽しく、潤いのある町になることを願ってこのように名付けられた。



21 村中通り(むらなかどおり)



寺脇橋から国道1号を南北に結ぶ道をいう。昔から、この道路の沿線に民家が密集していて、村で唯一の生活道路だったので、この名が付けられた。昭和14年白脇村福塚から浜松市に合併した時、この道は拡幅された。



22 学校通り(がっこうどおり)



なか道から東へ、中田島街道の白羽地下道を通して、白脇小学校へ通じる道をいう。朝夕の通勤、通学時に児童たちはこの道を歩き、自動車は県道舞坂・竜洋線を走るため、児童たちは安心して通学している。



23 白羽街道(しろわかいどう)



馬込川に架かる白羽橋を南北に通る道で、南は国道1号、北は瓜内町境までの道をいう。この街道は、中田島街道に対して、西の街道として発展してきた。白羽とは、白羽神社の祭神から名付けられたといわれている。



24 なか道(なかもみち)



町の中心を通る道であるため、このように名付けられた。この道の沿線には、白羽神社、法蔵寺、白羽町公会堂などがある。昔ながらの細い道だが、町民の生活道路として、広く町民に親しまれている。



25 大入道(おおいりみち)



白羽神社の東側の南北の道で、大入まで行く道であることから、このように名付けられた。大入とは、昔この付近で馬込川が氾行していた、大きな入江があったため、このように呼ばれたといわれている。



26 一本松通り(いっぽんまつどおり)



中田島街道と国道1号が交わる付近に、住民が一本松と呼んで親しんだ大木があった。この地点から北へ行く道をいう。昭和34年9月26日の伊勢湾台風でこの松は倒れてしまったが、いつまでも残しておきたい名称である。



27 本田中通り(ほんでんなかどおり)



中田島町は昔から本田、新田、新崎の三つの集落からなっている。今もこの字名は使われている。このため、それぞれの字の名称をとって、集落の中心を通っている道路にこれらの名が付けられた。この辺りに人が住みついたのは、はっきりしないが室町のころ、大石六兵衛によって開拓されてからと伝えられている。そして、この町にある海竜禅寺は、慶長年間(1596～1615年)大和国(奈良県)から移ってきた梅院慶宿和尚が、大石六兵衛の帰依を得て、海竜庵という草庵を建立したのが始まりといわれている。海竜禅寺のあるところが本田で、本田の開拓から中田島の村づくりが始まった。今は、中田島街道の東側の集落をいう。



28 新田中通り(しんでんなかどおり)



この通りは、小学校の通学路で朝夕、児童の元気なあいさつが飛び交うようお願いを込めて名付けられた。砂丘小学校は、昭和47年に創立された。



29 新崎中通り(しんざきなかどおり)



中田島街道の終点から西へ、中田島団地の南側の道をいう。遠州灘に連なる中田島海岸は、雄大な砂丘で知られ、海風によって様々なに変化する砂模様は陰影に富み、映画や写真撮影の好適地として知られている。



30 藺草通り(いぐさどおり)



市営中田島団地中ほどの南北の道で、昔この辺りで藺草を干したため、このように名付けられた。この地方では、明治の末から昭和の初めにかけて、藺草(草製の材料)の栽培が盛んだった。海岸の砂丘が藺草の乾燥に最適といわれている。



31 郵便局通り(ゆうびんきょくどおり)



浜松まつり会館の南側の交差点を西へ、中田島団地に通じる道をいう。この道沿いに、中田島郵便局があるため、このように名付けられた。この通りの中央帯は、防風林として松が植えられている。この辺りが海に近いことをうかがわせる。



32 あいさつ通り(あいさつどおり)



市営中田島団地の北側を、藺草通りから砂丘小学校へ通じる道をいう。この通りは、小学校の通学路で朝夕、児童の元気なあいさつが飛び交うようお願いを込めて名付けられた。砂丘小学校は、昭和47年に創立された。



33 砂丘通り(さきゅうどおり)



中田島街道の終点から西へ、中田島団地の南側の道をいう。遠州灘に連なる中田島海岸は、雄大な砂丘で知られ、海風によって様々なに変化する砂模様は陰影に富み、映画や写真撮影の好適地として知られている。



# 白脇地区 七か町の由来

## 白羽町（しろわちょう）

「曳馬拾遺」は、白羽地名の起源について「しら浪のよるひる絶えず立つによりてこの名やあるらん、又相良の白羽、掛塚の白羽、一つ国に三つの白羽ある事いかなる故にや、三ヶ所とも白羽の命を祭れるなり」と述べている。

この町の氏神様である白羽神社（前は春日明神社）の祭神は、白羽命である。

遠州灘の白波からくる説の他に、次のような説もある。その昔、六百年ほど前のこと、後醍醐天皇の皇子宗良親王が南朝の勢力を盛り返すために、吉野から軍団を率いて東へ向かう途中大しけに遭った。舟は、遠州白羽にうちあげられた。ある朝、風を切って飛んできた一本の白い矢が松の木に突き刺さった。村人が驚いて矢の飛んできた方角を見ると、貴人が軍団を従えて舟から降りてきた。目の前を通り過ぎていく貴人が宗良親王だと知ったとき、村人たちは道にひざまづき、親王の一行を見送ったという。白羽の地名はここから出ているという。この土地は、南朝方の支配下にあったので、ここを上陸地として宗良親王が伊勢の大湊を出航したことは確かなようである。

## 瓜内町（うりうちょう）

この町の小字を見ると、河原、西川原、川原、野畔、本田、北浦、池、村合、天白、中川原、などがある。この辺りは、太古はおそらく遠州灘が流れ込んでいた入り江であった。また、天竜川の流路でもあった。このことは小字の地名からも十分うかがえる。

また、竜が崎、竜が淵、太子淵と昔からこの町の周辺に住んでいる人々が呼んでいる一帯がある。この淵にまつわる伝説は有名である。馬込川流域の湿地帯はヘビが多い。ヘビや竜に関する伝説が生まれてくる。

- ・あるとき、暗雲が立ち込め夕立が降った。突然、竜が川から天へ舞い上がった。（曳馬拾遺）
- ・天文年間（1532～55）、この淵の近くに都から来た高僧宗円が、いおりを建てた。天井に大きなヘビが住み着いていたので、宗円がお経を唱えるといなくなり、以来、この地にヘビが見られなくなった。（浜松風土記）
- ・昔、海岸が近かったとき、竜を刻んだ木片が流れ着いた。村人はこれを竜神として祀った。これが竜禅寺の観音様である。（同寺の伝説）

この町は、瓜の特産地であった。土地が瓜の栽培、育成に適した条件を備えていたので、瓜地といていた。それが瓜内に変わったともいう。

## 楊子町（ようぢょう）

楊とは柳と同じ類である。柳は、北半球の湿地帯及び亜寒帯に多く見られ、川岸とか湿地に群生することが多い。

江戸時代の初めのころは、三嶋荒屋村または三嶋新屋村と一般に呼ばれていた。その後、家数も増えて田畑も開墾されてきたので、本村より独立した。この付近には、若々しい小さな楊が群生していたり、田のあぜ道に小さな楊を植えたりしたことから、楊の子—楊子と名付けられたという。

林泉寺の故伊藤軌玄住職は、にぎやかなことが大好きで、毎月3日の毘沙門天（びしゃもんてん）の祭りには、お堂を舞台にして青年団や旅役者の興業をさせたそうである。病氣治療で同寺に世話になったことのある歌謡漫談の川田晴久も巡業で浜松を訪れたときには、デビュー間もない美空ひばりや芸能人を引き連れ、小屋入りする前に毘沙門天のお堂で恩返し興業をしたということだ。

毘沙門天は、商売繁盛の神で水商売の女性のお参りが多かった。半玉が姉さん芸者に連れられて来た。源氏名を書いた提灯などを競って奉納したという。

## 三島町（みしまちょう）

三島大社（三島市）は、東関紀行に「伊予国三島よりうつし奉る」といい、伊予国にては大山祇命を設くを以て、ここにも同神を設きたり」と大日本地名辞書に出ている。江戸時代では三島大社と呼ばれ、有名な神社であった。三島町の浜松神社は、この三島大社を奉請して創建された新宮で、はじめは三島大明神とよばれていたこともあった。三島町という町名の由来は、この三島大明神が鎮座しているところから来るという説が有名である。また、ここは昔、天竜川の川原であり三つに分けられていたところに、人家の集まりが形成されたので三島と呼ばれたともいい、さらには天竜川の中州で三つの小高い平地があり、ここにそれぞれの田畑と家が作られたので三島と呼ぶようになったという説もある。

## 寺脇町（てらわきちょう）

世にも不思議な伝染病がまん延して、非常に多くの死者を出した年があった。先祖を懇ろに祀らないための祟りではないかと里人は思い死者の霊を慰めるようにと、当時としては多すぎる寺院を建立したという。この町にある四つの寺院（曹洞宗の法寿院・般若寺・臨済宗の高福寺・宝円寺）を中心として町が区分されていることから「寺分け」と里人は呼んでいたが、いつの間にか訛って寺脇というようになったともいう。（廃寺が一寺あり昔は五か寺であった）天正二年（1574）紀州・熊野神社の別当職だった鈴木次郎左衛門が勧進に来て当地に居を構えた。天竜川の下流、アシの生い茂った荒地だったこの地を、次郎左衛門が開拓した。いまだに鈴木家を「しばきり」（開拓者の意味）と呼ぶ人もいる。法寿院の檀家には鈴木姓が多く、鈴木家の菩提寺である。高福寺の檀家には山内の姓が多い。遠州天方城主だった山内家は今川義元によって滅ぼされるが、その残党が安住の地をここに求めたという。外波山氏は宝円寺、足立氏は般若寺を菩提寺としている。

## 福塚町（ふくづかちょう）

ここでいう塚とは、やや高い砂地を表すようである。福を呼ぶ浜の土地のニュアンスがある。この土地は、奈良時代以前は怒とう渦巻く遠州灘の入り江であった。八世紀の終わりから九世紀の初めにかけて、浜が隆起して豊かな農地となったことから福塚と呼ばれたそうだ。他の白脇地区同様、かつて太藪栽培が盛んに行われた。その太藪田ではタニシがよく取れ、家の蛋白源となっていた。最近、太藪作りの衰退と農薬の影響ですっかり姿を消した。

## 中田島町（なかたじまちょう）

もともと中田島は、天竜川の運ぶ土砂やたい積物によって、その河口に形作られ孤立した島だったという。この島の中に田ができ稲作が行われていたので、人々は中田島と呼んだ。江戸時代から明治時代にかけて中田島沖は、カツオの宝庫だったという。また、入り江ではクロダイがよく釣れて太公望でにぎわいを見せたようだ。浜松市の特産の太藪は中田島をはじめ、白羽、福塚、寺脇など馬込川周辺で盛んに栽培されていた。

### 令和3年度 南区地域力向上事業 地域愛称マップ(白脇地区)

企画・発行 / 浜松市  
(浜松市 南区役所 区民生活課 白脇協働センター)

引用 /  
愛称標識ガイドマップ 白脇地区  
わが町文化誌(しらわき 川と海に育まれて)

御協力 / 白脇地区自治会連合会  
・瓜内町自治会  
・白羽町自治会  
・砂丘自治会  
・寺脇町自治会  
・中田島町自治会  
・ビレッジハウス自治会  
白脇地区社会福祉協議会

デザイン・印刷 /  
株式会社クリエイティブプロジェクト・ズーム